

像をこえた思考にかかわるものとみられるから、詩人が認識するという事は矛盾ではないか、僭称ではないかという反論が直ちにはねかえってくるわけである。

詩人の書く詩論——詩の本質論——が詩の擁護論のひびきをもつのはイギリスではロマン派の詩人たち、ワーズワスやコールリッジ以来であるが、それ以来、「詩」に対立するものは「科学」と相場はきまっている。ルイスが「詩人の認識方法」というとき、それは「科学者の認識方法」と区別しこれと対立させると同時に、「認識」なる精神のハタラキは単に科学の独占ではないこと、つまり「認識」(‘Knowledge’の作用面を「認識」、結果を「知識」といおう)は科学のみならず詩によっても与えられることを闡明しようとしたわけである。

本書は1956年10月27日、Cambridge Newnham Collegeで行われたHenry Sidgwick Memorial Lectureである。詩人ルイスにはすでに*A Hope for Poetry* (1934), *Poetry for You* (1944), *The Poetic Image* (1947)等の啓蒙的また専門的な評論があり、これらは単純な事例をあげて詩のさまざまな姿を解説するなかに、実に示唆にとんだ含蓄のある内容が示されている。そうした点では本書もほとんど淡々と語られながら、随所に深い洞察をふくんだ指摘にぶつかる。

T. S. Eliot にならって、詩の本質論など無意味と片付けてしまえばそれまでだが、詩が批評を含まざるを得ない現在、詩人が詩の本質を考究することはほとんど必然といってよいだろう。

今世紀にはいって I. A. Richards がその *Science and Poetry* (1926) において行った詩の擁護論は、主として新興の心理学的装置のなかで詩的経験の独自性と人生的な意義を解明し、詩と科学との機能を区別した点に特徴があるとすれば、このルイスの所論は、や

---

Cecil Day Lewis :

*The Poet's Way of  
Knowledge*

山本和平

「詩人の認識方法」という表題はおそらくたいていの読者の眼には先ず奇異なものに映るであろう。「詩人」と「認識」とはおよそ矛盾する観念だとわれわれの常識は承知しているからである。認識とはふつう感覚や記憶

はり第二次大戦後の詩論の成果のひとつである Lawrence Durrell の *A Key to Modern British Poetry* (1952) と同じく、科学と詩の差別と共に、類似・共通の面の指摘をも含む——というよりはむしろ、それぞれの精神活動のある重要な面においては全く類似した過程をたどるということ——という点では、在来の、たんに詩独自の領分を確保するといういわば「政治的な」詩論といささかおもむきを異にしているようである。

Durrell の上記の著書を見ると、現代科学、とくにアインシュタインの「相対性原理」が主体-客体関係における在来の仮定を一変させ、またフロイト以来の「精神分析」学派が無意識の発見によってヒトの魂なるものの構造に注目して以来、科学は在来の機械論的な原理に依拠する科学に、いわばいたげられていた詩を——詩的活動と科学者の活動との類縁性の確立を容易ならしめたことによって——解放したというふうに見えるのである。

さてルイスは「その昔詩と科学はひとつで呪術とよばれた」という人類学の常識から語りだす。これは詩と科学を現代において結合する決め手にはならないが、ひとつの象徴的支柱にはなる。リチャーズが『科学と詩』のなかですでに呪術的世界観の科学的世界観による駆逐を詩の存在そのものの危機として詳説したがルイスもおなじである。

科学が呪術と完全に手を切ったのは 17 世紀の科学革命においてであるが、以来詩は科学とは別の方向をたどってきた。もし人類最初の前科学的仮説がアニミズムであり、またその方法が模倣であるとすれば、詩がいまなお模倣とアニミズムに依拠するかぎり、詩は極めてプリミティブな行為とみえるにちがいない。しかしルイスは「詩は認識を獲得し、伝達するひとつの方法」であることを主張し、詩と科学はそれぞれの分野で両立しうる目的のために働くものとみるのである。

そこで詩と科学との関係、すなわち詩独自の領域の決定と両者の類縁性の指摘が本論の課題となる。

まず詩は科学と対立する価値のないものという俗説を打破しなければならないだろう。ルイスは言う。詩は純粋な想像力の所産にすぎず、‘real things’ と無縁であるから認識の名に値いしないというのが「ある事物の感じ(‘feel’)はその感じの対象である事物と同様 real な事実(‘fact’)ではないのか。したがって、ある経験の質ないし価値の伝達は、物理的事実や自然法則によるその経験の分析におとらず有用な、認識への貢献ではないだろうか。」

これはまことに素朴であるが実に重大な事実の指摘であると思う。mind とか soul とかしか呼びよのないもの——そこにおいて人間的な、real な経験がなされる場——及びそれを通さなければ経験しえない reality の存在を強調しているのである。ここには詩人ルイスの経験と経験に根ざした自負がこめられている。

次にルイスはたとえ話をういて、科学的認識(科学的活動)と詩的認識(詩的活動)との差別をするが、この例は実に巧みだとおもう。

詩人のワーズワスが人類学者のジョーンズなる男と西部高地地方へ旅に出たと仮定する。彼らはある畑でひとり刈る娘を見、その娘が二人の知らない歌をうたっているのをきく。この事件にたいして詩人と科学者とはいかなる反応をするであろうか。ジョーンズは早速テーブ・レコーダーを運んできてもういちど娘に歌ってもらう。その間、ワーズワスは手で耳をおさえている。ジョーンズは知的好奇心から再びその近辺にもどり数ヶ月間野外調査をする。彼はそこが文化の孤立地帯なることを発見し、学術雑誌に「スコットランド西部における残存文化類型の研究ノート」なる

論文を寄稿し、それに刺激されて多くの事実が報告、集積され、「ジョーンズの第一法則」ができあがる。

一方詩人はこの事件にたいして詩的認識をおこなう。科学者のばあい、娘のうたう歌は相似た事実の集積中のひとつにすぎないが、詩人にとってこの経験は唯一性をもつ。彼はこの束の間の経験を 'A Solitary Reaper' (「独り刈る乙女」) なる詩のなかに不易なるものに固定する。ある特定な魂の状態を認識させる詩がここにある。

さて次に「認識」なる語を内面の状態の記述(詩)に附与することの可否が問題となる。詩は認識へ寄与するといえるのか。

反論の第一は、自分の感情とか精神状態はおのれのものだからあえて認識させていただく必要はないという乱暴なものである(こうした意見は乱暴だがかなり多いとぼくは思う。彼らは幸福な種族である)。次に、「認識」には予測可能性が条件として必要であるが、この「独り刈る乙女」なる詩への反応は、読者各人によって異なり、一定した共通の反応を予測することはできないから、「認識」を与えるとはいえないという反論である。

これに対してはしかるべき読者ならその詩の趣旨についての反応は共通である。すなわち「真理の確信——この詩によってより明確に、より深く、より烈しく認識しえたという感覚——は共通である」という。

次に認識=予測可能性という仮定は今日の科学者は承認しないことをハイゼンバークの「不確定性原理」を例にひきつつ説明し、自然科学が微視的現象の探求にむかうにつれて、詩人の認識に近づいてくる。科学者も詩人もそれぞれの分野でともに不確実の領域をできるだけ縮小しようと、reality に一層迫ろうと努力している。

第三の反論は知覚(perception)にもとづいている。詩は科学と異なり知覚しえぬもの

に従事している。それは吟味や証明を許さないがゆえに知覚しえぬ領域における活動は認識を生むとはいえぬ、というのがそれである。これに対しては、現代物理学の関心の対象の多くも直接五官で知覚しえぬものではないかと反撥し、マーチン・ジョンソンの『芸術と科学的思考』を引用して「芸術と科学とは、ボタン、構造、形式を通じてそれぞれ片や感情という質的領域、片や測定という量的領域において mental images の伝達に努めているとみなすのは有益なことだ」と主張するのである。

次に今日の詩人の詩作方法が科学者のそれと類似することを指摘する。詩人は科学者と同様、自分の仕事を探索(exploration)と考えている。詩人は自己の経験を結びつけること、明確にすること、より高い自己認識に到達することをねがっている。何事かを自己に伝達することをねがっている。これに成功すれば読者に伝達できることにもなる。現在、詩人は自然や人間の行動や徳性の模倣とは考えずむしろ経験の再整理、ないしは記憶の象徴的価値の再発見の過程と考えているのである。

では経験の再整理、記憶の象徴的価値の再発見——換言すれば詩の創造過程とはいかなるものか、それは科学的発見の過程といかなる類似性を示すか。maker としての詩人の内面の問題に視点がむけられる。この創造の過程の記述は、実作者としてのルイスの経験の分析と考えられ、実に示唆にとむものである。一切の精神活動は混沌(chaos)から秩序(cosmos)への運動であるとすれば、詩作においても科学的発見においてもそこに共通性がみられるのは当然であろう。

ルイスはいう。詩作の初期の段階は暗中模索である。構想(conception)と形式は不可分のものであり、詩は、成長するボタンを通じてのみ主題(theme)があきらかにされ

る有機体であるから、完全な青写真の完成をまわって建築にとりかかるといった事柄とはちがう。

この段階において、科学研究における‘doubt’に等しい経験データの吟味がなされる。主題を明確にするために全経験データが吟味されていく。明確にされた主題こそ経験に詩的意味を与え、かくして独自の心的状態が伝達されるのである。

こうした詩作初期の、主題発見にいたる暗中模索の段階は、科学、哲学、芸術のそれとかなり類似したところが認められるとして、A. N. ホワイトヘッド、R. C. コリンウッド、及びロージャ・フライの所説を引用する。詩人が主題を発見するのは徐々の過程のはてであり、それは科学者が諸事実間の関係を認知するのが、事実を集積・分類し、きびしく吟味したあとであるのと同じである。さらに、詩的活動＝想像力、科学的活動＝理性とするのは俗説である。なぜなら事実から一般化への想像的飛躍がなければいかなる理論的発見も行われぬし、また詩人も、コトバ、リズム、イメージの撰択等においては理性をはたらかせねばならないからだという。

以上詩的創造と科学的発見の過程における精神活動の類似性を指摘したあとで、現代の詩人が科学知識にたいしてとる態度及び、その利用について論を進めていく。

詩人は時代思想に刺激され、時代の風土に反応するものである。その際詩人の直面する困難には二つある。第一に、科学自体が極度に専門化したため、そこから容易にひとつのコスモロジーをひきだしえないことである。「しかし詩人の分野は人間の心とその価値であり人間の心が近代の科学理論及び技術によって広汎に影響されているとすれば、自らの探求において、自分の歩いているこの定めない地帯を考慮にいれること」苛酷な現実から眼をそらすべきでない」と強調する。

第二の困難は技術的なものである。科学上の発見や発明及びそれを利用した事物は、「長い間の感覚的情結的の言及によって積み重ねられた、そしてそこにこそ詩が根ざしうる深い土壌」を欠いている。また科学理論は不断に修正・再調整がなされるため、詩が飛躍するための基礎たりえない。

しかし George Whalley 教授は *Poetic Process* において ‘interface’ なる科学概念を詩的経験の説明に類比的に利用し成功している。

さて詩人の役割は人生の平凡な出来事の重大さ (momentousness) を示すことであり、それは人間及び地球が、科学が開示した時空の広大な遠景を背に無意味なほど縮まってしまった時更に一層重要である。人間生活の場の究極の意義を悟ることは宗教以外にないにしても、その意義、その重要性を少くとも知覚せしめてくれるのは詩である。今日詩が科学を矯正し、補足するものとして最もよく働きうるのはこの意味においてなのである。

科学が人間に示す、外の宇宙及び内なる宇宙の姿は詩人の meditation のすばらしい題材なのに、それに想像的意味を与える詩人がみられないことをルイスは悲しんでいる。

そして最後に Richard Carrington を引用して「科学・芸術・宗教はすべて認識の一技術であり、等しい妥当性をもって、意識の異なる段階において働く」ものであるという本論の趣旨を要約している。

以上ルイスの論旨をたどってみたが、やはり生彩のあるのは彼の詩作の体験がにじみでている創作過程の叙述の部分である。むろん講演でもあり、またルイスは学者ではないから、体系的述作にみられるような首尾一貫性はない。科学理論と詩法の類似性の強調というなら、あの『アレキサンドリア四部作』の小説家 Lawrence Durrell が行った講義録(前にあげた *A Key*)には知的な青年の熱い

こんだ調子といったものが息づいていて面白  
かろうし、冷静で緻密な分析を期待するなら  
George Whalley: *Poetic Process* (1953) の  
方が満足できるであろう。

しかし慾をいえばきりがないのであって、  
詩的リアリティとしてみたところで、その  
経験のないものは遂にわからずといった次第  
で、「自己意識」にまつわる謎は容易なこと  
で解けないらしい。

Cecil Day Lewis: *The Poet's Way of  
Knowledge*, Cambridge Univ. Press. 1957.

訂 正

目次および 103 ページ

The Poet's Way of Knowlege は

Knowledge に訂正